

# 茶人から北東アジア人へ

—北東アジア地域アイデンティティーの構築ステップについて—

## 張 建 立

はじめに

1. 茶道——北東アジア諸民族の共同文化遺産
  2. 茶道——コミュニケーションスキルを磨く最適な道具
  3. 茶人——慎み深い侘び人
  4. 茶心——世界平和に通じる和の心
- むすび

### はじめに

今日の世界情勢を見渡せば、グローバリゼーションが加速度的に進行している一方、EUをはじめとする地域統合の動きも活発になっている。北東アジアに生きるわれわれの多くは、紆余曲折はあるにしても、いずれ北東アジアにも、その土壤にあった、経済的・政治的・文化的地域統合体としての「北東アジア共同体」が創設されるものと確信している。そして、今日の北東アジア統合のアナロジーを、かつてのヨーロッパに求めた時、見えてくるのは、地域共同体が、三つの条件を共有しながらつくられていく現実である。すなわち、共通の脅威と共通の利益、共通のアイデンティティーである<sup>1</sup>。

ところが、現在の北東アジアの状況を見れば、共通の脅威については、まったく一致した認識はなく、むしろお互いに警戒し合う状態でもいえよう。中国脅威論、日本軍国主義の台頭論、朝鮮半島の非核化問題などはその表れであろう。

共通の利益については、「北東アジア共同体」の主要メンバーとなるべき中・日・韓の三国間では、すでに一定の共通認識に至っている。戦略互惠関係といった言葉は、まさにそれを物語る言葉である。FTA 締結を進めようとする動きも共通の利益を求めるためである。中・日・韓の三国では、20世紀90年代から、「北東アジア共同体」に向けて、経済面からさまざまなアプローチが行われ、特に1997年7月タイで発生したアジア通貨危機以降、「アジア共通通貨」構想も議論されるようになっていく<sup>2</sup>。

---

1 進藤栄一著『東アジア共同体をどうつくるか』、筑摩書房、2007年、15頁。

2 谷口誠著『東アジア共同体——経済統合のゆくえと日本——』、岩波書店、2004年第1刷、

現在、三国間の経済依存関係はますます深まりつつあるにもかかわらず、「共同体意識」つまり北東アジア人としての共通のアイデンティティー<sup>3</sup>は、一向に育ってこない。共通のアイデンティティーこそが、やがて来る北東アジア共同体の基礎となるものであるが、それは足りない。その原因は、いろいろ考えられるが、しかし政治家同士だけではなく、一般国民間のコミュニケーション不足も、その大きな原因の一つであるといえよう。

コミュニケーションを十分かつ円滑に行うために、共通の文化はまず必要不可欠となる。同じ漢字文化圏に属するわれわれ北東アジア人にとっては、最も共通点の多い文化といえ、漢字のほか、まず茶道を挙げるべきであろう。本稿では、北東アジア地域アイデンティティーの構築に向けて、文化の視点から一つの小さな提案を行いたい。即ち、われわれはまず茶人となって、お茶の修行を通じてコミュニケーションスキルを磨きながら、北東アジア地域共通のアイデンティティーの構築実現に向けて努力すべきであると提言したい。

なぜ、このような提言を行うかといえ、北東アジアは世界の喫茶文化の発信地であり、茶道は、北東アジア諸民族がさまざまな交流を通して蓄積してきた大切な共同文化遺産であり、コミュニケーションスキルを磨く最適な道具でもある。また、理想とされている茶人像是慎み深い侘び人であり、茶道の心が世界平和にも通じる和の心であるからである。以下、その理由について少し具体的に述べてみたい。

## 1. 茶道——北東アジア諸民族の共同文化遺産

中国は茶の原産地であると同時に、喫茶文化の発祥地でもある。現在、「茶」を意味する世界各国の言葉は、中国の広東語の CH'A と福建語の TAY の二系譜に従って、大きく二つのグループに分けることが出来る。広東語の CH'A に属するものとして、日本語の茶 (CHA)、ポルトガル語、ヒンズー語、ペルシア語の CHA、アラビア語、ロシア語の CHAI、トルコ語の CHAY などがある。一方、福建語の TAY (TE) に属するものの系譜としては、オランダ語の THEE、ドイツ語の TEE、英語の TEA、フランス語の THÉ などがあるという<sup>4</sup>。そして、中国唐時代に使われ始めた「茶道」の語も、十九世紀からすでに中日韓三カ国で共通的に使われている用語となっている。

日本茶の湯文化学会倉澤行洋前会長は、「茶道の語の最初の使用は中国においてであっ

---

2005年第3刷、206頁。

3 「アイデンティティー (identity)」という言葉は、近年、社会科学の分野で、各国の学会、メディア界、さらには、政界、財界や一般市民の議論や会話でも、最も喚起力を有する言葉として使われるようになってきた。広辞苑では、「人格における存在証明または同一性。ある人の一貫性が時間的・空間的に成り立ち、それが他者や共同体からも認められていること。自己同一性。同一性」というふうに解釈されているが、現在は「帰属意識」という意味で使われるケースが一般的である。

4 角山栄『茶の世界史』、中央公論社、1980年、12頁。

た。茶文化の歴史を広い視野で回顧してみると、日本茶道は、譬えていえば、中国茶道を母として生まれ、日本に渡って大きく成長した子供であった。子が親を見習って育ち、親が負うた子に教えられるのは自然なことである。茶道に国境は無い。』<sup>5</sup>と指摘したように、北東アジアでは、茶道は北東アジア諸民族の友好的な文化交流の賜物であり、平和のシンボルといっても過言ではない。今日、世界的にみても類を見ない、深遠な哲理に裏付けられた総合的な生活文化にまで成長した茶道の内容は、建築、庭園、書画、陶磁器、竹器、漆器もあれば、生け花、香道、料理、礼儀、点前作法などもあり、ほぼ日常生活の各分野のことをすべて内包している。そして、道教、陰陽道、儒教、仏教、神道、キリスト教などの思想を一身に集約させ、それぞれ建築、庭園、書画、陶磁器、竹器、漆器、生け花、香道、料理、礼儀、点前作法などの諸方面に体现されている。

このような豊富な内容をもつ茶道の中では、東アジア諸民族の作り出した文化をいろいろな形に凝縮して表現している。中国の文化要素や朝鮮半島の文化要素は随所に見られる。例えば、茶室の構造が朝鮮の民家からの影響を受けていると指摘されているし<sup>6</sup>、茶道の基準茶室——四畳半茶室の空間は、「元来易経の陰陽五行思想に基づいて構築された、凝縮された小宇宙であった」し、国宝にもなっている天目茶碗は勿論のこと、元々ただの飯碗であった井戸茶碗などの高麗茶碗は、今でも茶人に極めて珍重されている。このような総合生活文化としての茶道は、まさに北東アジア文化の精華だといえる。茶道そのものは、北東アジア諸民族の大切な共同文化遺産である一方、建築、庭園、書画、陶磁器、竹器、漆器などの多くの有形文化遺産だけではなく、礼儀作法など無形の文化遺産の伝承保存にも大きく貢献している。

また、岡倉天心の『茶の本』に「茶道は日常生活の俗事の中に存する美しきものを崇拝することに基づく一種の儀式であって、純粹と調和、相互愛の神秘、社会秩序のローマン主義を諄々と教えるものである。」と指摘されている<sup>7</sup>。茶道を大切にすれば、北東アジア人の共通アイデンティティーの構築のために、きっと大きな役割を果たすことができると期待したい。

## 2. 茶道——コミュニケーションスキルを磨く最適な道具

人間のコミュニケーションには、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションがある。実は、茶道は言語コミュニケーションスキルだけではなく、非言語コミュニケーションスキルを磨くにも最適な道具である。長年茶道を修行されてきた茶人たちの阿吽の

5 東君『茶から茶道へ』「序」、市井社、1998年、4頁。

6 中村利則「待庵原像」、『別冊太陽 利休の茶会』平凡社1990年；同氏「茶室『待庵』が語る真実」、『歴史街道』74号、1994年。

7 関根宗中『総合藝術としての茶道と易思想』、淡交社2009年、148頁。

呼吸で自ずと合致する立ち居振る舞いは、まるで芸術のような、鑑賞に値するものである。この意味においては、茶道は、点茶と喫茶を通じて行うコミュニケーションの芸術とでもいえよう。

まず言語コミュニケーションについて、茶道の初心者にとっては、決まり文句で警官の尋問みたいなお茶の挨拶ほど退屈なものはないと思うかもしれない。しかし、お茶の修行を重ねていくうちに、お茶の挨拶ほど難しく楽しいものはないと、次第に感じるようになるはずである。なぜかといえば、本当のお茶の挨拶は、只管に褒めちぎるのではなく、功言令色入るべからず、簡単であるが、時宜に適い情趣深く余情を含むものでなければならない。また、相手がいてこそ自分がここにいることができることに対する感謝の気持ちのこもった挨拶でなければならない。このような挨拶は、まず様々な学識を積まなければ到底出来るものではない。

また、千利休の師である武野紹鷗は客人振りの事について、次のような言葉を残している。

大方、一座建立に在、条々口伝多し、一義初心のため紹鷗語り置れ候者なり、但、当時きらはれ候、端々夜話の時、申出され候、第一、朝夕寄合間成共、道具の開き、又は口切不及申、常の茶湯成とも、露地へはいひ入るから立まで、一期一度の参会のやうに亭主を敬畏て可感也、公事の儀、世間の雑語悉く無用、

夢庵狂歌二曰

我佛隣の宝髻舅天下の軍人の善悪

この歌にて分別すべし、茶湯雑談、数寄に入事は咄すへし、全て又、茶の立前は無言、<sup>8</sup>つまり、さまざまな学識を積んだ上、さらに宗教、俗っぽい世間話、政治談議や他人の噂話や悪口などを茶席の会話内容にしてはならない、というような心構えも必要とされている。お茶の修行に励んでいけば、われわれの伝統文化を身につけるだけでなく、同時に非常に洗練された言語のコミュニケーションスキルをも身につけることになるであろう。

実際、茶道の特質に注目すると、言語コミュニケーションより、非言語コミュニケーションのほうにもっと長けている。以心伝心、賓主歴然・賓主一如、「主人の匱相は客の匱相、客の匱相は主人の匱相」<sup>9</sup>などといった、茶人たちに重要視されている言葉があるように、茶道では、非言語コミュニケーションスキルも非常に重要視されている。茶道には、様々な点前作法がある。点前とは、道具を茶室の畳に持ち出し、決められた位置にその道具を置き、決められた方法でその道具を使ってお茶を点てる作法である。この作法を程よい緩急で、美しい姿で完成させるには、勿論亭主としての力量は絶対必要であろうが、しかし

8 岡倉覚三著・村岡博訳『茶の本』、岩波書店、1970年、19頁。

9 千宗室編『茶道古典全集』第三巻、淡交社、1977年、29頁。

亭主一方の努力だけでは到底出来るものではなく、同時に客も修行を積む必要があるとされている。修行を積んだ主客同士であってこそ、たとえ無言でも互いに心で感応し合って初めて最高の火相と湯相を整えることができ、最高の茶趣を楽しむことができるとしている。

『南方録』の「滅後」に

休云、昔隅切ノ炉マデハ、炭ヲツギタル時、客衆見物スルト云コトハナシ、コレ台子ヨリウツリタル折カラナレバ、台子ニテ炭見物ナキマ、ニテアリケル古風ナリケルニ、右切ノ向炉ニ成テ、客ノ眼下ナルユヘ釜引アゲタル時、炉中ヲ見入テ、火相ニ心ヲ付、サテ炭ヲ次タルヲ見テ、其座ノノベチヅメ、火ノウツリヲ急ギ、又ハウツリヲ遠クスル等ノ、主ノ心ヅカイニ感ヲオコシ挨拶シケルコトナルヲ、コノ比ノ茶人ハ、ヒトヘニ炭ヲ饗膳ノモリカタノヤウニ心得、主モソレヲ専ニヲキナラベ、客モ其モリヲ見物シテ、炭ノ出来不出来ヲ挨拶スルコトニナレリ、大ナルヒガコトナリ、シカレドモ、根本露地ノ茶ノ本意、湯アヒ・火相・三炭ノ次第ヲモ、ワキマヘヌ輩ハサコソト覚ルナリ、

とある。ここでは、色々細かく記されているが、要するに「根本露地ノ茶ノ本意、湯アヒ・火相・三炭ノ次第」だから、火相と湯相を常に最高の状態に保ち、一座を建立するためには、亭主だけではなく、客も「主ノ心ヅカイニ感ヲオコシ」、つまり主客の心が常に感応しながら立居振舞をすべきである。さらに具体的に云うと、例えば、炭手前のとき、炭火の流れを拝見し観念しながら、その移り具合にも心をつけて、席中の挨拶や所作及び再度の席入のことなどを考慮しつつ行動すべきである。賓主歴然しかも賓主一如となつてはじめて「遅速ノベチヅメヲ知ズ、火相・湯相アシク成也」というような最悪の事態を免れるわけである。

茶道はスポーツほど体を動かしていないが、実際、点前作法も心・技・体の合一を非常に重要視するものである。お茶の稽古を通じて、主客同士個々人の眼・耳・鼻・舌・心・意の修行になるだけではなく、しかもお互いに証し合うことができる。『南方録』「覚書」では、利休は、「客・亭主、互ノ心モチイカヤウニ得心シテシカルベキヤ」と問われて、「イカニモ互ノ心ニカナフガヨシ、シカレドモカナイタガルハアシ、得道ノ客・亭主ナレバ、ヲノヅカラコ、ロヨキモノ也、未練ノ人互ニ心ニカナハウトノミスレバ、一方、道ニチガヘバトモタ々ニアヤマチスル也、サレバコソ、カナフハヨシ、カナイタガルハアシ、」<sup>10</sup>と答えているように、素直で、ありのままの姿でお互いに会心のコミュニケーションを取ることができる、つまり「カナフハヨシ、カナイタガルハアシ、」<sup>11</sup>、これこそ、茶人たちが茶道稽古によって到達しようとしている境地である。このような境地は、まさに

10 奥田正造『茶味』、1920年初版、1941年改装版、2002年平成版、方丈堂出版、52頁。

11 千宗室編『茶道古典全集』第四巻、淡交社、1977年、5頁。

われわれ人間同士のコミュニケーションの最高の境地ともいえよう。無言のうち、整然と、きちんと秩序立っている茶人功者の所作を拝見するたびに、コミュニケーションスキルを磨く道具として、皆様にお茶の稽古を薦めたくなる。

### 3. 茶人——慎み深い侘び人

近年、地球温暖化問題が盛んに議論されるようになった。こういった問題の根本な原因は、無反省な現代人の無限の欲望によるものである。

人間は一種の社会性のある動物として、その欲望は限りないかもしれないが、しかしその実際の要求は限度があるものである。例えば、いくら満漢全席を食べたいといっても、それを一人で全部食べ切れてしまう人はまずいないであろう。人によっては、数種のおかずだけで、もうお腹いっぱいになってしまうかもしれない。文化心理学では、「安全、社会交際と地位」は、すべての文化モデルの人にとり必要不可欠な社会要求であると見ている。安全、社交、地位という三種類の社会要求は互いに関連し合い、影響し合う。現実生活の中で、人間が単一要求のために行動する場合は極めて少なく、往々にして一種の要求には他の要求が付随するものである。人間の各種の社会要求は、順に生物性、社会性、感情性要求という三つのレベルに分けられる。

日本茶道の聖典ともいわれている『南方録』「覚書」の冒頭に

茶湯は台子を根本とすることなれども、心の至る所は、草の小座敷にしくことなしと、常々の給ふハ、いか様の子細か候と申。宗易の云、小座敷の茶の湯は、第一佛法を以て修行得道する事也、家居の結構、食事の珍味を樂とするは俗世の事也、家ハもらぬほど、食事ハ飢ぬほどにてたる事也。是佛の教、茶の湯の本意也、水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、佛にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ、花をたて香をたく、ミな、佛祖の行ひのあとを覺ぶ也、なを委しくハわ僧の明めにあるべしとの給ふ<sup>12</sup>

とあるように、『南方録』「覚書」冒頭の言葉は、実に茶道の真諦を非常に的確かつ概括的に指摘している。すなわち、茶道は、人間の欲望、人間としての最低限の要求への反省に基づいて構築されてきた文化であり、茶道修行者の生物性の要求を満たしただけではなく、同時に程よく茶道修行者の社会性の要求を満たし、さらに最大限に茶道修行者の感情性の要求を満たした。

このような茶道を修行することによって目指そうとしている人間像が、十八世紀以降から今日にかけて、多くの茶道の宗匠、色々な角度から茶道を研究する学者達によって、唱えられてきた。

---

12 千宗室編『茶道古典全集』第四巻、淡交社、1977年、3頁。

まずは、五世藪内紹智の『源流茶話』に「茶道ハ我朝世教の一路にして尤儒釈に功有といふべき物也」、「茶道ハ正直清浄礼和質朴を宗とし、清浄を以て心をやしなひ、正直を以て世間に接し、礼讓を以て人ニ交り、質朴を以て身ををさむ」、「此道を以て心の師友とし、身を修、道を行ふのたすけとせば、真の茶人、茶の徳共申べき物也、」とある<sup>13</sup>。

裏千家十一世玄玄斎宗室によって著された「茶道源意」には「茶道ノ源意ハ忠孝五常ヲ精励シ、節儉質素ヲ専ラニ守リ、分限相応タル家務ニ怠ラス……」とある。即ち、茶道の実践は儒家人倫思想の実践でもあると玄玄斎宗匠は主張している。

井伊直弼はその著書『入門記』の中に「抑喫茶道者、脩心之術而萬法之上無漏、故於唐同茶歌有七碗喫茶之事、自五倫之道備而、己己之励勤本業之助」と記し<sup>14</sup>、茶道は心を脩む術で、職業や身分などの区別なくあらゆる人の本業の助けとなるはずのものであると定義づけている。

倉沢行洋氏は「茶道には、二つの意味が含まれている。一つは、茶を点てたり喫んだりすることを機縁として、言い換えれば『茶湯』を機縁として、『心』を深め、高める『道』と言う意味である。いま一つは、そうやって深められ・高められた『心』のはたらきとして、茶を点てたり喫んだりする、つまり茶湯を行う、『道』という意味である。これをつづめていえば、茶道とは、茶から心への道であり、また心から茶への道である。」という<sup>15</sup>。

茶道に励んでいる修行者が、すべて上の理想を目指して修行しているかといえば、必ずしも一概にそうとは言えないが、しかしこのような理想の茶人像は、われわれ北東アジア世界に生きるものとして共感をもてるものであろう。環境保護、省エネ社会の構築が叫ばれて久しいが、このような慎み深い茶人の精神を生かすことができれば、大いに役立つであろう。

#### 4. 茶心——世界平和に通じる和の心

茶心即ち茶道精神が、もっとも簡潔にまとめられたのは、「和・敬・清・寂」という四つの語である。茶道に携わる人間はともかく、それ以外の人々にもよく知られている語であろう。御覧の通り、「和」が一位に挙げられている。

もともと「和」の字は声を合わせる意で、『詩経』「小雅伝」に「会九族曰和」とあるように、あつまり、やわらぐという意もあった。また『中庸』に「發而皆中節、謂和。和也者、天下之達道也。」と言うように、和即ち過不及のない行為でもある。なお、『論語』「学而篇」には「有子曰、礼之用和為貴」とある。周知の通り、「以和為貴」は聖徳太子の十七条憲

13 『源流茶話』（前掲『茶道古典全集』第三巻）

14 『入門記』（井伊正弘・倉沢行洋校訂解題『井伊直弼茶書 一期一会』1、灯影舎、1988年）。

15 倉沢行洋「一期一会 覚書」（前掲『井伊直弼茶書 一期一会』1）、なお、同氏『増補 芸道の哲学』（東方出版1993年）と『東洋と西洋』（東方出版1995年）で氏の茶道論を詳しく論じている。

法の中に見える語でもある。いずれも人間同士或いは個人修養における和を説いていた言葉である。

茶道精神の「和」について、人間同士或いは個人修養における和というふうには解釈されるのが一般的である。勿論、このような「和」も茶道においても大事だが、しかし「和・敬・清・寂」の「和」はもう一つ最も大きな意味を持っているはずである。それは天と人或いは天・地・人の調和、即ち天と人或いは天・地・人の合一である。「天と人或いは天・地・人の合一」は、『易経』に述べられている陰陽調和の「太和觀」とまったく同じである。『易経・象乾』に「保太和、乃利貞」とあるように、「天と人或いは天・地・人の合一」は、宇宙における最も調和した最高の状態である。また社会生活及び生命個体の自然物質生活と精神文化生活の最も調和した状態である。茶道では、点前作法の面から言えば、この「天地人合一」の状態を作り出すために、カネ割り法によらなければならない。このカネ割り法は実は完全に易経思想を理論根拠として創られていたのである<sup>16</sup>。茶人にとっては、茶道修行の目的の一つとして、まさに人間と人間の間、人間と他人及び社会の間、人間と天地宇宙の間、人間とその自我心身の間との普遍的な調和の中で達成できた和楽閑適の境涯を努めて求めているのである。

世界文明史をひもとけばわかるように、たった一片の2、3センチの小さな茶葉は、地域文明だけではなく、世界文明にも大きな影響を及ぼしてきた。この易に基づく茶道の「和」の理念は、われわれ北東アジアの基底文化理念である一方、今日の世界にも最も必要とされるべき理念であろう。調和のとれた北東アジア社会、平和の世界を建設するために、茶道の和の精神を大いに発揚していくべきである。また、北東アジアでは、茶道を復興させることによって、北東アジア人が長い間にわたって共有してきた文化的同質性の回復にもつながることができるであろう。

## むすび

以上、早期の北東アジア共同体の成立に向けて、制度などのハード面からの提言に対して、文化というソフト面から提言を試みた。つまり、北東アジア地域アイデンティティーの構築ステップについて考える際、茶人から北東アジア人へというステップを提言した。そして、茶道を取り上げた理由について、簡単に述べた。

裏千家茶道を習っている方なら、誰でも知っている下記の「ことば」がある。

私達は茶道の真の相（すがた）を学び、それを実践にうつして、たえず己の心をかえりみて一碗を手にしては多くの恩愛に感謝をささげ、お互いに人々によって生かされていることを知る茶道のよさをみんなに伝えるよう努力しましょう。

---

16 関根宗中『総合藝術としての茶道と易思想』、淡交社、2009年、第3章。

- 一、他人をあなどることなく、いつも思いやりが先にたつように
- 一、家元は親、同門は兄弟で、共に一体であるから、誰にあっても合掌する心を忘れぬように
- 一、道を修めなお励みつつも、初心を忘れぬように
- 一、豊かな心で人々に交わり、世の中が明るく暮らせるように

裏千家淡交会行事、お稽古の際は一番初めに、みなさん合掌して声をそろえてこの「ことば」を唱和する。それによって、一体感を得ることを目的としているであろうが、人によってこれを唱えるたびに、自分自身の行いをチェックすることもできる。

人によっては、お酒に酔ったら失礼な言動に出るかもしれないが、しかし茶道での喫茶は和気藹々のムードが盛り上がるだけであって、喧嘩する心配はない。緑は平和の色である。どうか一碗のお茶を頂く和の心を以て、常に自己反省を行い、なお思いやりの心を以て、人々と仲良く付き合い、世の中を明るくしていこう。

キーワード 北東アジア アイデンティティー 茶道 茶人 茶心

(ZHANG Jianli)